

## ナイチンゲールの犠牲

庭の真ん中に、美しいバラの木がありました。

ナイチンゲールはそのバラの木へ飛んでいき、言いました。

「赤いバラをくださいな」

そして「そうしたら、私の一番きれいな歌をあなたに歌ってあげましょう」と鳴きました。

「申し訳ないね、僕のバラは山の上の雪、そして海の泡のように白いんだ」と彼は答えました。

「日時計の周りにはいる僕の兄弟に聞いてごらん。きっと君を助けてあげられるよ」

ナイチンゲールは日時計のもとへ飛んでいき、バラの木に向かって言いました。

「赤いバラをくださいな」

そして「そうしたら、私の一番きれいな歌をあなたに歌ってあげましょう」と鳴きました。

「申し訳ないね、僕のバラはラップズイセンのように黄色いんだ」と彼は答えました。

「学生が住む窓の下にはいる僕の兄弟に聞いてごらん。きっと君を助けてあげられるよ」

ナイチンゲールはその窓のもとへ飛んでいき、バラに頼みました。

「赤いバラをくださいな」

そして「そうしたら、私の一番きれいな歌をあなたに歌ってあげましょう」と鳴きました。

「申し訳ないね、僕のバラは海のサンゴのように赤いんだが、冬が寒くて枝が折れてしまったんだ。今年は花が咲かないよ」

「でも、私はたった一輪のバラが必要なだけなのです。私にできることは何もないのかしら？」

「君にできることが一つあるけれど、僕は教えないよ。それはとても恐ろしいことなんだ」

「それが何なのか教えてくださいな。怖くはありません」とナイチンゲールは言いました。

「もし君が赤いバラを望むなら、音楽と共に月明かりでそれを作り、君自身の血で染め上げなければならない。一晩中、僕に歌いかけ、僕のとげの一つに君の心臓を押し当てなければならない。一晩中、君は歌わなくてはならないし、君の血は、僕の血になるんだ」

「一輪のバラのためには、死は大きな代償です」とナイチンゲールは言いました。

「皆、生きることが好きなのです。私は生きることが好きです。空を飛ぶことが、花々を眺めることが、そして風の中でその香りを嗅ぐことが好きです。でも愛は生きることより素晴らしいわ…それに、人間の心臓は鳥の心臓より大切ですが、学生はバラを手にするようになるわ」